

Dysphagia Research Society 2015 印象記



2015年3月11日から14日までシカゴで
23rd Dysphagia Research Society 2015
に参加しポスター発表を行いましたので
ご報告します。

ポスター発表のタイトルは“Nutrition Support Team Improve Oral Intake at Discharge among Post Stroke Patients”というもので、内容は、脳梗塞患者の入院中の経口摂取獲得に効果のあった要因を分析したところ、栄養サポートチーム (NST) 介入に強い効果を認めたというものです。ポスターは紙のポスターと電子ポスターの両方の準備が求められ、発表者は会期中の決まった時間にポスター前に立ち、参加者からの質問に回答するという形式がとられていました。言語聴覚士 (SLP: 日本のST) が中心の嚥下障害についての多職種学会 (消化器内科、リハ科、耳鼻科医を含む)

でしたが、栄養については現在注目はされているが演題として取り上げている物は他にはなく、新しい視点であるというコメントを参加者からいただきました。interdisciplinary (他職種協同) というのは重要なキーワードであったようで、口腔ケアのできる歯科衛生士がチームに入っていることは高く評価されました。学会の参加者は500名、口演50題、ポスター117題。米国外からの参加者が25%。ブラジルやヨーロッパ、ニュージーランドからの参加者もいました。日本からの演題は10題。普段雑誌の論文で見ている名前の方と直接お話し触れ合うことができ、大変な刺激を受けました。

横浜市立脳卒中・神経脊椎センター
リハビリテーション科 中尾真理

第 52 回 日本リハビリテーション医学会学術集会印象記

佐渡汽船乗り場からほど近い朱鷺メッセで 5 月 28 日～30 日の 3 日間開催された、第 52 回日本リハビリテーション医学会学術集会に参加しました。

まず第 1 日目はランチョンセミナーで機能的電気刺激装置(FES)に関する松元秀次先生の講演を拝聴しました。腓骨神経への FES を用いた歩行訓練を行うことで MEP の改善が得られたことが示され、脳可塑性への影響も示唆されました。

2 日目は脊椎転移患者におけるリハについて発表をさせていただきました。後方視的調査から、約 1 ヶ月の入院リハ治療期間設定を提案するものでした。会場からご助言等いただき、今後に活かしていきたいと思えます。

3 日目は、近年話題となっている再生医療についての演題発表を聞くことができました。田代祥一先生が示されたのは、慢性期脊髄損傷モデルマウスに対する神経幹細胞移植とトレッドミル歩行訓練の併用療法についてです。対照群と比較して有意に軸索・シナプス新生が増加し、さらには痙縮・異常痛覚が抑制する結果が得られており、再生医療においてもリハビリテーションが重要な役割を果たすことが示されていました。

また、今回の学会では設立 50 周年記念事業として宇宙飛行士として活躍されている向井千秋先生の特別講演がありました。宇宙産業に関するお話は非常に魅力的でした。一方、“work in space”が普遍的となった宇宙産業において、無重力環境下長期滞在による廃用や老化類似症状の予防・改善におけるリハビリテーションの重要性を語られたことについては身の引き締まる思いでした。

全体を振り返り、既存分野の更なる発展に加えて宇宙産業・再生医療との関わりを知ることができ、リハビリテーション医学が次のステージへと進んでいることを感じさせられた学会でした。



第 31 回日本義肢装具学会学術大会印象記

2015 年 11 月 6 日～8 日まで 3 日間にわたり、パシフィコ横浜で開催された第 31 回日本義肢装具学会学術大会に参加しました。

1980 年代後半から、横浜市立大学リハビリテーション科が臨床分野で尽力して参りました『地域リハビリテーション』を体現した『地域リハビリテーションにおける義肢・装具・支援機器』を主テーマ

に掲げました。第 30 回岡山大会終了直後から、水落和也大会長のもと、神奈川で長く活躍する理学療法士・作業療法士・リハ工学士・義肢装具士を企画・運営委員に迎え入れ、職種の壁を超えた『オール神奈川』の体制で臨んだ、特別な学術大会でした。

サブテーマを「障害者スポーツ」、「座位保持・車椅子シーティング」、「社会参加」とし、生きた補装具「介助犬」デモンストレーションや昨今話題にのぼる機会の多い「リハビリテーションロボット」、「障害者の旅行」など、運営委員の尽力によりシンポジウムを企画・開催し、多岐にわたる学術大会を開催いたしました。さらに、横浜市民を対象とした次世代育成事業として「バリアフリーは創るもの 体験！生活を豊かにする驚きの機器」を企画しました。この企画は横浜市文化観光局との共催で、横浜市の中

学生とその保護者の方々に参加していただきました。実際義肢、装具、車いす、介助犬などに触れる機会を得て次世代を担う中学生達の心に福祉機器が刻まれたと思われま

す。発表形式にも趣向を凝らし、動画セッションでは動画に音声収録されており大変聴講しやすく、立ち見が出る程盛況でありました。展示ホールには連日大勢の人で賑わい、ポスターセッションでも活発な討論がなされていました。市民公開講座の『旅に出よう。みんな一緒に！』では旅を諦めていた障害者の方々と旅行に行く体験談が報告され、我々や障害者の方々に生きる勇気と感動を与えてくれました。

私は高次脳機能障害、障害者スポーツの分野に興味があり、義肢装具利用による QOL の変化について検討した発表、障害者スポーツ分野における義肢・装具使用のパフォーマンス分析が数多く見られ、自身の知見を深めることができました。また、義肢装具士やリハビリテーション工学スタッフによる実生活での義肢装具使用についての問題点や苦悩を聞くことができ、とても有意義な機会をいただきました。私個人は、長期間に渡る切断患者の経過を報告し、理学療法士、義肢装具士から多角的多面的な質問やご意見をいただきました。

このような多職種の間を繋ぐ医療系学術大会の参加・運営することができ、非常に貴重な経験を得ることができました。2 年弱前から企画・運営に携わった委員の皆様、日本旅行の皆様に対し、此処に心からの感謝を申し上げます。

横浜市立大学附属病院 リハビリテーション科 浅野広大



第 50 回日本脊髄障害医学会印象記

グランドプリンスホテル高輪で 11 月 19 日, 20 日に開催された第 50 回日本脊髄障害医学会に参加しました。

1 日目は里宇先生の特別講演がありました。「Brain-machine interface(BMI)技術が招くリハビリテーションの新たな可能性」という題でのご講演で、文科省脳科学研究戦略推進プログラムにもなっており現在は脳卒中後の多関節複合運動障害の回復に向けた BMI リハビリロボット技術の開発・臨床応用や多次元脳イメージングによる効果機序の解明などに取り組みられていました。演題では、泌尿器のセッションで当院の岩崎先生による脊髄損傷者に発生した膀胱癌についての検討がありました。当院通院中の脊髄損傷者のうち膀胱癌と診断された 7 例についての検討がなされ、特にカテーテル長期留置例で悪性度が高いとの報告でした。当科外来通院患者にもカテーテル留置例が多数存在するため、注意深い観察の必要性を感じました。

2 日目にはノーベル賞を受賞された京都大学の山中伸弥先生による iPS 細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組みについての講演がありました。現在臨床応用に向けて多様な HLA 型の医療用 iPS 細胞ストックを作成するプロジェクトが進められており、140 人のドナーにより日本人の 90%をカバーできると話されており、再生医療の汎用化が期待されました。また、iPS 細胞を用いて希少疾患や難病の病態を再現することによる病態解明や創薬スクリーニングなどの研究も進行しており、iPS 細胞の多様な可能性を感じました。

また、この日は山海先生 HAL についてのご講演もあり、嗅粘膜移植との併用療法や小児用 HAL の開発など、ロボットリハビリテーションが応用の域にまで進んでいることを実感することができました。

全体を通じ、脊髄障害についての基本的な内容のみならず最新の知見も得られ、非常に有意義な学会参加となりました。

神奈川リハビリテーション病院 後期研修医 山上大亮

第10回 日本リハビリテーション医学会専門医会学術集会印象記

2015年11月28日～29日東京ソラシティーカンファレンスセンターで開催された第10回日本リハビリテーション医学会専門医会学術集会に参加しました。今年は、本学会に専門医会が発足して10年目となるそうです。メインテーマは『専門医新時代 ～今こそアピール、リハ医の真価～』で、シンポジウム、パネルディスカッション、ハンズオンセミナー、教育講演、一般演題など、様々な領域や立場でリハビリテーション科医をされている先生方の講演が多くプログラムされていました。私は、両日とも教育講演を中心に聴講しました。

一日目は、水落和也先生が座長で、慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室大森まいこ先生が講演された『がんのリハビリテーションにおけるリハ医の役割』を聴講しました。がんと共存（がんの治療が終了、あるいは治療中のがん生存者は年々増加し、その数は500万人超とのこと）する現代社会で、がんのリハビリテーションの重要性が高まってきていることを改めて認識し、そのアプローチについても大変参考になりました。



二日目は、リハビリテーション科医として地域医療に貢献されている沖井クリニック 沖井 明先生の講演を聴講しました。地元地域のかかりつけ医業の継承と、そこに『リハ相談外来』を開設し、脳卒中の痙縮や装具、嚥下に関する相談、膝・腰の痛み、しびれの相談、転倒に関する相談などを行

ってきた経験を、経営的な側面も含めてお話を聴くことができ、大変貴重な機会となりました。

また、二日目のランチタイムには、有志のリハ医の先生方によるコンサートが行われていました。近年の日本リハビリテーション医学会関連学会などでは、毎回素敵な演奏会をされています。

本学術集会は1200名を超える参加者となったそうで、大変興味深い内容の演題が多く、盛大で有意義な集会でした。今回の学術集会で得た知識等を日々の臨床に活かしつつ、このような学会活動にも参加できるよう精進していききたいと思います。

横浜市総合リハビリテーションセンター リハビリテーション科 稲澤 明香